

公
式
令
草
案

赤書 || 現行制

臣博文 帝室制度調査ノ

大命ヲ恪ミ夙夜ニ規畫スル所アリ惟ルニ皇室典範ニ基キテ發スル皇室ノ
令規ハ其ノ式樣未々明カナラサルヲ以テモ一定セムニハ現行ノ公文
式ヲ改正シ其ノ規模ヲ示ササルヘカラス而シテ公文式ハ十數年前ノ制
ニ係ルヲ以テ皇室ト相渉ラサル他ノ公文ノ式樣ニ至リテモ亦帝國憲法
實施ノ今日ニ恊貼セサルモノ多シ故ニ局僚ヲシテ慎重研覈シ別冊公式
令草案ヲ具草シテ及覆審議ヲ罄シサシメ遂ニ各種ノ公文ニ就キテ一
之ヲ釐正ヲ加ヘ其ノ更革ノ理由ヲ逐條ノ下ニ疏釋シテ以テ遺蘊ナカラ
シメ茲ニ之ヲ查定スルコトヲ得タリ乃謹テ

睿覽ニ供シ恭シク

聖裁ヲ仰キ併セラ内閣ノ議ニ下サレムコトヲ奏請ス

明治三十七年十月十日

帝室制度調査局總裁侯爵臣伊藤博文謹上

公式令上諭案

朕茲ニ各種公文ノ式様ヲ改定スルノ必要ヲ認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ公
式令ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名 御璽

年月日

國務大臣宮内大臣副署

勅令第 號

公式令

恭テ按スルニ公文ノ式様ハ主權發令ノ規模ヲ明徴ニスル所以ニシテ
須ク制度ノ釐革ニ鑒ミテ以テ時宜ニ協ハシムヘシ顧フニ現行ノ公文
式ハ明治十九年ノ制定ニ係リ元老院ニ於テ法律ヲ議定シタル當時ノ
方式ヲ條舉セルニ過キス立憲ノ紀綱既ニ張リ帝國議會協賛ノ制既ニ
定マレル今日ニ在テ舊章ヲ株守シ難キハ論ナク尚他ニ更正ヲ必要ト
スル理由甚多シ其ノ大要蓋五アリ抑ニ法律ハ已ニ法例第一條ニ依リ
公布ノ後滿二十日ヲ經テ之ヲ施行スト定メラレタリ而シテ命令ニ關
シテハ仍公文式第十條ノ規定ヲ存シ官報到達ノ後七日ヲ以テ之カ施
行ノ時期トシ彼此均衡ヲ失セリ是レ其ノ一ナリ法律命令ノ外尚詔勅
アルハ明ニ皇室典範及帝國憲法ノ認ルル所ニシテ官報詔勅ノ欄ニ於
テ重要ノ事件ヲ公布セラレタルハ已ニ屢々實例アリ憲法附屬ノ法令

ニ於テモ亦之ヲ發セラルヘキ場合ヲ規定シタルモノ一ニシテ足ラス
公文式ハ其ノ方式ニ就キ一モ規定スル所ナシ是レ其ノ二ナリ皇室典
範帝國憲法ノ改正ニ就テハ一定ノ公式ナカルヘカラス而シテ公文式
ハ此レニ關シ何等明著スル所アルヲ見ス國際條約裁計豫算ノ如キ重
要ノ公文ニ至リテモ亦然リ是レ其ノ三ナリ官報^記位^記記^記等ニ關シ
テモ亦未タ率由スヘキノ常軌ヲ詳示セス是レ其ノ四ナリ若夫レ皇室
典範ニ基キテ發スル諸規則ニ至リテハ固ヨリ官廳及人民ニ對シテ一
般ニ有効ノ公文タラシメサルヘカラス而シテ公文式ハ此レニ關シ毫
モ式様ヲ提明セサルカ故ニ前途皇室ノ諸規則ヲ制定セラレムトスル
ニ當リ枝梧ヲ生スルノ虞アリ是レ其ノ五ナリ又^{或ハ其ノ本書ノ保存}
ニ關シテ成條ヲ關シ其ノ餘瑣微ノ舛漏ニ至リテハ枚舉ニ遑アラズ就
中皇室ノ諸規則ニ關シ規定スル所ナキハ最重大ナル闕典ニ屬ス是レ
本令制定ノ已ム能ハサル所以ニシテ今ノ時ヲ趁ヒ各種公文ノ方式ヲ

改定スルハ寔ニ急務ナルヲ倍ス但ニ名稱ヲ公式令ト改メタルハ大寶
令用語ニ沿ルナリ

第一條 皇室ノ大事ヲ宣誥シ及大權ノ施行ニ關スル勅旨ヲ宣誥スルハ別
 般ノ形式ニ依ルモノヲ除ク外詔書ヲ以テス
 詔書ニハ親署、後御璽ヲ鈐シ其ノ皇室ノ大事ニ關スルモノニハ宮内大
 臣年月日ヲ記入シ内閣總理大臣及内大臣ト俱ニ之ニ副署ス其ノ大權ノ
 施行ニ關スルモノニハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ他ノ國務各大臣ト
 俱ニ之ニ副署ス

恭テ按スルニ詔書勅書ノ事大寶公式令ノ義解ニ「詔書勅旨、同是綸言、但
 臨時大事、為詔、尋常小事、為勅也」トアリ事ノ大小ヲ以テ詔ト勅トヲ區別
 シタリ而シテ此ノ兩字後世ノ用例未タ必シモ其ノ定義ニ準據セス維
 新以降ニ至リテモ亦然リ明治十六年官報發行心得條件ヲ定ムルニ及
 テハ詔ト勅トヲ渾融シテ之ヲ一欄ニ繫クノ例ヲ開ケリ帝國憲法第五
 十五條ニ所謂詔勅ニ至リテモ詔及勅ヲ並稱スルモノニシテ詔勅ト
 ノ外別ニ詔勅ナルモノアルヲ認メタルニハ非ス既ニ二様ノ名義ヲ存

シテ其ノ區別ヲ明ニセサルハ事ノ宜ヲ得タルモノト云フハカラス故
 ニ茲ニ公文式ヲ改正スルニ當リ略、大寶公式令ノ定義ニ則リ傍現在ノ
 制度ニ考ヘテ之ヲ變通シ特ニ左ノ二種ノ公文ヲ詔書ト爲シ以テ第二
 條ニ所謂勅書ト區別セムトス

一、皇室ノ大事ヲ宣誥スルモノ
 二、大權ノ施行ニ關スル勅旨ヲ宣誥スルモノ

抑、皇室ノ大事トハ踐祚即位立后立太子立太孫攝政ノ置罷變更ノ如キ
 ヲ云フ之ヲ宣誥スルニ詔書ヲ以テスルハ皇室典範第十大條ニ「皇后皇
 太子皇太孫ヲ立ツルトキハ詔書ヲ以テ之ヲ公布スアルノ例ニ循フ
 ナリ宮内大臣ヲシテ此ノ類ノ詔書ニ年月日ヲ記入シ之ニ副署セシム
 ルハ其ノ事ノ皇室ニ關スル故ヲ以テ宜ク奉行ノ責ニ任セシムヘキニ
 因ル又内大臣ヲシテ之ニ副署セシムルハ御璽ヲ尚藏シテ常侍輔弼ノ
 任ニ在ルコト官制ノ定ムル所ナルヲ以テ其ノ責任ヲ明ニスルニ外ナ

スハ内大臣内大臣ハ國務大臣ニ非ス故ニ也ニ副署スルモ素ヨ
リ帝國憲法第五十五條ニ依リ其ノ責ニ任スルニハ非サルナリ又内閣
總理大臣ヲシテ皇座ノ大事ニ關スル詔書ニ副署セシムルハ他ナシ皇
座ノ大事ハ即テ是レ國家ノ大事ナルニ因ル
大權ノ施行ニ關スル勅旨ニ至リテハ勅令トシテ公布セラルルモノヲ
除ク外官報詔勅ノ欄ニ於テ宣誥セラレタルモノ多シ例ハ宣戰講和
勅章爵制ノ制定ニ關スル勅旨ノ如シ而シテ帝國憲法及附屬法令ニ於
テハ勅命勅許勅諭等ノ名稱ヲ用ヰタルモ其ノ實體ニ視テ大權ノ施行
ニ關シ宣誥セラルルモノハ悉ク之ヲ詔書ト爲スヲ至當トシ茲ニ其ノ
公式ヲ一定セムトス即テ

帝國議會會期延長ノ勅命(帝國憲法第四十二條)
臨時會ノ會期ヲ定ムル勅命(同第四十三條)
解散後新ニ議員ノ選舉ヲ命スル勅命(同第四十五條)

議會召集ノ勅諭(議院法第一條)

議會開會ノ勅命(同第五條)

議會閉會ノ勅命(同第三十六條)

衆議院議員選舉期日ヲ定ムル勅命(衆議院議員選舉法第二十八條)

伯子男爵議員選舉ノ數ヲ定ムル勅命(貴族院伯子男爵議員選舉規則

第五條)

ノ如キハ詔書ノ形式ニ依ルヘキモノタルヲ疑ハス

詔書ニハ皇族會議樞密顧問ノ諮詢又ハ議決ヲ經タル事項ニ關スルモ
ノアリ然レトモ本條ニ於テ其ノ諮詢又ハ議決ヲ經タル旨ヲ詔書ニ記
載スヘキコトヲ掲明セサルハ皇族會議樞密顧問ハ事體ノ當否ヲ議ス
ルニ止マリ詔書ヲ議スルニ非ス且莊重ナル詔書ニ記載スヘキノ要件
ノ公式トシテ規定スルハ事ノ宜ヲ得タルモノニ非サルハナリ固ヨリ
隨便之ヲ記載スルヲ妨クルコトナシ

附記 凡ソ副署ハ内閣總理大臣ヲ以テ首位ニ置クヘシ是レ内閣總理大臣ハ國務ヲ統理シ萬機ヲ奏宣スルノ任ニ在ルヲ以テナリ自餘ノ大臣ノ副署ハ都テ宮中席次ヲ以テ其ノ順序トスルヲ妥當ナリト認ム以下ノ諸條此レヲ以テ類推スヘキナリ

第二條 文書ニ由リ發スル勅旨ニシテ宣誥セサルモノハ別段ノ形式ニ依

ルモノヲ除ク外勅書ヲ以テス

勅書ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ其ノ皇室ノ事務ニ關スルモノハ宮内大

臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス其ノ國務大臣ノ職務ニ關スルモノニハ内

閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス

恭テ按スルニ本條ハ宣誥ヲ要セサル勅旨ニシテ示命セラルルモノハ

勅書ヲ以テスヘキコトヲ定メ以テ詔書ト區別ス蓋勅書ノ稱ハ皇室典

範第四十條ニ「皇族ノ婚嫁ハ勅許ニ依ルトアリテ次條ニ「婚嫁ヲ許可ス

ルノ勅書ハ宮内大臣之ニ副署ス」トアルニ循ヘルナリ又同第四十六條

ニ「世傳御料ニ編入スル土地物件ハ樞密顧問ニ諮詢シ勅書ヲ以テ之ヲ

定メ宮内大臣之ヲ公告ストアルハ適以テ勅書ハ其ノ事項ヲ宣誥スル

ノ形式ニ非サルノ一證ト為スヘキナリ」

右ノ外皇室ノ事務ニ關シ皇室典範ニ規定シタル勅旨ニシテ勅書ヲ以

テスヘキモノヲ例示セハ左ノ如シ

親王内親王ノ號ノ宣賜(第三十二條)

皇族ノ後見人ノ認可又ハ勅選(第三十七條)

皇族ト婚嫁スルコトヲ得ル華族ノ認許(第三十九條)

皇族外國旅行ノ勅許(第四十三條)

内親王女王ノ稱ヲ有セシムルノ特旨(第四十四條)

皇族相互ノ民事訴訟ニ關シ裁判員ヲ命スル勅旨(第四十九條)

勅旨ノ「國務大臣ノ職務ニ關スルモノ」ト云ヒ單ニ「國務ニ關スルモノ」ト

云ハサルハ皇室ノ事務ニ亦是レ廣義ニ於ケル國務ナルニ因ル試ニ法

令ノ規定又ハ慣例ニ依ル事項ニシテ本條ニ依リ勅書ヲ以テスヘキモノ

ノヲ例示セハ左ノ如シ

帝國憲法改正ノ議案ヲ議會ニ付スル勅命(憲法第七十三條)

元勳優待ノ特旨(慣例)

前官ノ待遇ヲ賜フ特旨(慣例)

國務大臣トシテ内閣員ニ列スル特旨(内閣官制第十條)

元帥ノ稱號ヲ賜フ特旨(元帥府條例第一條)

以上ノ勅旨中ニハ從來副署ノ式ヲ用ヰサリシモノアリト雖其ノ事體ヨリスレハ國務大臣ノ責任ニ關スルモノナルカ故ニ宜ク本條ノ正式ニ依ルヘキナリ

勅旨ノ文書ニ由ラサルモノハ即チ勅語ナリ而シテ帝國議會閣會閉會ノ勅語ノ如キハ國務大臣ノ輔弼ニ由ルモノニシテ文書ニ記シ之ヲ議會ニ賜ハルト雖此レ素ヨリ勅語ノ筆寫ニ外ナラサルヲ以テ本令ニ於テ其ノ式樣ヲ示スヘキノ限内ニ在ラス之ニ及ビ明治二十三年十月三十日ノ教育勅語ハ其ノ實體ニ於テハ宣ク詔書タルヘキモノニシテ而モ御名御璽ヲ存スルニ拘ラス國務大臣ノ之ニ副署スルナラス之ヲ宣誥スルノ正式ニ依ラサリシハ一ノ變例ト視ルノ外ナシ

授爵授勲授位授任ノ如キモ文書ヲ以テスル勅旨ニシテ宣誥ヲ要セサルモノナリ然レトモ皆別段ノ形式アルヲ以テ本條ニ依ルノ限ニ在ラ

ス
勅書ニ皇族會議及樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル旨ヲ記載スルノ式ヲ取ラサル理由ハ詔書ノ場合ニ同シ

第三^四條

皇室典範、改正ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ皇族會議及樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ國務各大臣及内大臣ト俱ニ之ニ副署ス

恭テ按スルニ皇室典範ノ改正ハ其ノ第六十二條ニ於テ既ニ條件ヲ備ヘタリ然レトモ其ノ公布ノ方式ニ關シテハ未タ準據トスヘキモノアラズ故ニ茲ニ之ヲ規定ス

皇室典範ハ帝國憲法ト共ニ國家ノ根本法ニシテ並ニ行ハレテ相成ルコトナキハ皇位繼承ノ順序及攝政ノ事ニ至リテ憲法ハ之ヲ典範ニ讓ルヲ以テ觀テモ已ニ明ナリ而シテ憲法第七十四條第二項ニ「皇室典範ヲ以テ此ノ憲法ノ條規ヲ變更スルコトヲ得スト」アルニ因リ其ノ義ヲ推原スレハ典範ハ實ニ憲法ヲ變更セサル範圍内ニ於テ普通ノ法令ニ凌駕スル効力アルモノナルコト自ラ明瞭ナリ加之典範ノ施行ニ至リ

テハ普通ノ司法及行政ノ事務ニ聯涉スルモノ多キコト亦固ヨリ言ラ俟タズ故ニ憲法施行後ノ今日ニ於テハ向後之ヲ改正ヲ爲スニハ必國務大臣ノ副署ヲ以テ正式ニ公布セシメラルルヲ當然トス其ノ宮内大臣及内大臣ノ副署ヲ必要ト認メタル理由ハ皇室ノ大事ニ關スル詔書ノ場合ニ同シ

第三
第四條

帝國憲法ノ改正ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ樞密顧問、諮詢及帝國憲法第七十三條ニ依ル帝國議會

ノ議決ヲ經タル旨ヲ記載シ親署、後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ

記入シ他ノ國務各大臣ト俱ニ之ニ副署ス

恭テ按スルニ帝國憲法ノ改正ハ其ノ第七十三條ニ於テ既ニ條件ヲ備
ヘタリ然レトモ其ノ公布ノ方式ニ關シテハ未タ準據トスヘキモノ
ラス故ニ茲ニ之ヲ規定ス

有

第五條 皇室典範又ハ帝國憲法、改正ハ公布ニ先テ賢所皇靈殿神殿ニ親

祭奉告シ奉幣使ヲ神宮神武天皇山陵先帝山陵ニ發遣ス

然ラ按スルニ本條ハ初皇室典範及帝國憲法ヲ制定セララルルニ當リ天

皇其ノ履行ヲ皇祖皇宗及皇考ニ誓ヒ神祐ヲ禱リタマヒタル先蹤ヲ追

ヒヨルナリ

〇、宮内官制其他皇室事務ニ關シ勅定ヲ經タル規定ニシテ發表ヲ要スルモノ

第五
第六條

皇室典範ニ基ク諸規則ハ皇室令トシ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署

ス國務大臣ノ職務ニ關連スル皇室令ノ上諭ニハ内閣總理大臣又ハ内閣總理大臣及主任ノ

國務大臣ト俱ニ之ニ副署ス

皇族會議及樞密顧問又ハ其ノ一方ノ諮詢ヲ經タル皇室令ノ上諭ニハ其

ノ旨ヲ記載ス

恭テ按スルニ我カ國法ノ沿革ニ於テ皇室ノ諸規則モ亦公令トシテ公

布セラレ衆庶ノ普ク服従スルノ義務ヲ負フ所タルコトハ律令格式ノ

皇室ノ事務ニ聯涉スルモノ多キニ視テ復タ疑ヲ容レス維新以後ニ至

リテモ太政官ノ布告布達ニシテ皇室ノ事務ヲ規定スルモノ枚擧ニ違

アラス而シテ此ノ關係ハ明治十八年十二月ノ官制改革ノ爲ニ何等更

革ヲ經タルニ非ス皇室典範既ニ帝國憲法ト共ニ國家ノ根本法タリ則

チ之ニ基キテ發スルノ皇室令ハ憲法上ノ命令ト均ク國家有効ノ制令

ニ屬ス本令因テ著シテ一條ト爲シ其ノ意ヲ明徴ニシ以テ一般官廳及

人民ヲ拘束スルカアル所以ヲ確實ニシタリ而シテ皇室令ノ國務大臣

ノ職務ニ關連スルモノニ就テ國務大臣ヲシテ俱ニ副署セシムルハ責

任ノ歸スル所ヲ明ニスルナリ乃此ノ種ノ皇室令ヲ制定スルニ當リテ

ハ豫宮内大臣ト關係ノ國務大臣ト協議ヲ遂ケ彼此ノ間ニ疏通ノ便ヲ

圖リ以テ干格ノ虞ナカラシムヘキナリ

第六
第七條

法律ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ帝國議會ノ協賛ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐
シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署シ又ハ他ノ國務各大臣若ハ主
任ノ國務大臣ト俱ニ之ニ副署ス

樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル法律ノ上諭ニハ其ノ旨ヲ記載ス

恭テ按スルニ本條ハ帝國憲法ノ實施ニ因リ立法ノ形式ヲ改メタルニ
伴フ公式ヲ規定スルモノニシテ既ニ慣用スル所ナリ唯憲法附屬ノ法
律其ノ他樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル法律ノ上諭ニ其ノ旨ヲ記載スルハ
從來ノ慣例ニ非サルモ慎重ノ審議ヲ經タル事實ヲ示ス爲之ヲ記載ス
ルヲ妥當トス

第七條

勅令ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署シ又ハ他ノ國務各大臣若ハ主任ノ國務大臣ト俱ニ之ニ副署ス皇室ノ事務ニ關連スル勅令ノ上諭ニハ宮内大臣モ俱ニ之ニ副署ス

樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル勅令及貴族院ノ諮詢又ハ議決ヲ經タル勅令ノ上諭ニハ其ノ旨ヲ記載シ帝國憲法第八條第一項又ハ第七十條第一項ニ依リ發スル勅令ノ上諭ニハ其ノ旨ヲ記載ス

帝國議會ニ於テ帝國憲法第八條第一項ノ勅令ヲ承諾セサル場合ニ於テ其ノ效カヲ失フコトヲ公布スル勅令ノ上諭ニハ同條第二項ニ依ル旨ヲ記載ス

恭テ按スルニ本條ハ慣行ニ依リ勅令ノ公式ヲ定ム但、現行ノ制度ニ於テハ勅令ノ各省專任ノ行政事務ニ屬スルモノハ主任ノ各省大臣ノ之ニ副署スヘキモノト爲スモ内閣總理大臣ハ行政各部ヲ統督スル職

15

責アルヲ以テ凡テ勅令ニハ其ノ副署ヲ要スルモノトシ其ノ皇室ノ事務ニ關連スル勅令モ亦同ヨリ國務大臣ノ輔弼ニ須ツヘキモノナルヲ以テ之カ副署ヲ要スルノミナラス宮内大臣ハ執行ノ責任スヘキモノナルニ因リ俱ニ之カ副署ヲ要スルコトトセリ

宮内大臣ヲシテ副署セシムルハ從來ノ慣行ニ非ス今其ノ皇室ノ事務ニ關連スルモノニ就テ特ニ此ノ例ヲ創メタルハ亦猶皇室令ノ國務大臣ノ職務ニ關連スルモノニ就テ國務大臣ヲシテ宮内大臣ト俱ニ之ニ副署セシムルニ同シ而モ宮内大臣カ當ニ任スヘキノ執行ノ責ハ帝國憲法第五十五條ニ依ルモノニ非サルハ第一條詔書ノ下ニ述ヘタルカ如シ

抑宮内大臣ハ宮内省官制ノ定ムル所ニ依リ其ノ主任ノ事務ニ關シ警視總監北海道廳長官府縣知事ニ任命シ又臣民ニ命令告示スル職權ヲ有ス故ニ從前此ノ途ニ由リ地方官ヲシテ皇室ノ事務ヲ行ハシムルニ

當リ往往臣民ノ憲法上ノ權利自由ニ涉ルモノアリ此等ハ固ヨリ地方
人民カ臣子ノ誠情ヲ輸シ喜テ其ノ義務ニ服スル所ナルカ故ニ事實ニ
於テ支障ナキニ似タリト雖尚法律上ノ關係ハ之ヲ明ニシテ立憲ノ旨
派ニ合セシムルヲ要ス然ルニ宮内大臣ハ國務大臣ニ非サルカ故ニ憲
法上ノ官ニ任スルコトナク又其ノ地方官ニ對スル示命ハ各省大臣ヲ
經由ヘルニ非ナルカ故ニ各省大臣モ亦其ノ責ニ任スルニ由ナシ是ヲ
以テ將來ニ於テハ臣民ノ憲法上ノ權利自由ニ涉ルカ如キ事重要ニ屬
スルモノハ勅令ヲ以テ其ノ準則ヲ定メ宮内大臣ト俱ニ之ニ副署シタ
ル國務大臣ノ責任ヲ以テ執行セシムルヲ妥當トス

若夫レ宮内省官制ニ至リテハ從來宮内大臣奉勅ノ達ヲ以テ公布シタ
ルカ故ニ往往ニシテ宮内省ハ國家ノ官廳ニ非サルカ如キ疑惑ヲ懷カ
シメタリト雖皇室ノ事務モ亦國家ノ事務タリ既ニ國家ノ事務タル以
上ハ之ヲ司掌スヘキ宮内省モ亦國家ノ官廳タルハ勿論ニシテ其ノ實

16

體ニ於テ他ノ各省ト異ナル所アルヘカラス是ヲ以テ向後宮内省官制
モ亦行政各部ノ官制ト同ク勅令ヲ以テ之ヲ公布スヘキナリ

樞密院官制第六條ニ依リ一定ノ勅令ハ必樞密院ノ諮詢ニ付セラルヘ
ク其ノ他ノ勅令ニ至リテモ亦便宜諮詢ニ付セラルルコトアルヘシ此
ノ場合ニ其ノ旨ヲ上諭ニ記載スルハ慎重ノ審議ヲ經タル事實ヲ明ニ
スルナリ又本條ニ貴族院ノ諮詢ヲ經タル勅令トアルハ華族ノ特權ニ
關スルモノヲ謂ヒ其ノ議決ヲ經タル勅令トアルハ貴族院令ヲ改正増
補スルモノヲ謂フ帝國憲法第八條及第七十條ニ依リテ發スル勅令ニ
至リテハ各其ノ據ル所アルカ故ニ上諭ニ於テ其ノ依準スル所ヲ明示
スルノ制ヲ取レリ而シテ帝國議會ヲ緊急勅令ヲ承諾セサル場合ニ於
テ其ノ効力ヲ失フコトヲ公布スルハ勅令ヲ以テスルノ慣例ヲ爲セル
ニ由リ茲ニ其ノ公式ヲ一定シタリ

第九條

國際條約ヲ發表スルトキハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐

シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ主任ノ國務大臣ト俱ニ之ニ副署ス

恭テ按スルニ從來條約ハ概官報勅令ノ欄ニ於テ之ヲ公布シタリ然レ

トモ條約ハ大權ノ發動ニ因ル特殊ノ公文トシテ効力ヲ有スルカ故ニ

更ニ特立ノ公式ニ依ルノ制ヲ立テ本條ノ如ク規定シタリ而シテ法律

勅令俱ニ必内閣總理大臣ノ副署ヲ要スルモノトシタル以上ハ條約ノ

公布モ亦均シク内閣總理大臣ノ副署ニ須ツモノタルヘキヲ以テ主任

ノ國務大臣ニ限り之ニ副署スルノ例ヲ改メ更ニ連署ノ制ヲ取レリ又

諸般ノ國際條約ハ必樞密顧問ノ諮詢ニ付セラルヘキコト載セテ樞密

院官制ニ詳ナルヲ以テ其ノ旨ヲ上諭ニ記載スルコトトナシタリ

九。豫算及豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スル件
第十條 國家ノ歲計豫算ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ帝國議會ノ協賛ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐
シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ他ノ國務各大臣ト俱ニ之ニ副署ス

恭テ按スルニ本條ハ慣行ニ依リ國家歲計豫算ノ公式ヲ定メタリ蓋帝
國憲法ニ於テハ豫算ハ法律ト視ルモ又之ヲ勅令ト視ルモ均ク其ノ當
ヲ得タルモノニ非ス豫算ハ即チ豫算トシテ自ラ一種ノ公文タルハ從
來ノ慣例モ亦之ヲ認ム惟公式ヲ闕クノ故ヲ以テ本條之ヲ規定ス慣例
ニ依レハ其ノ副署ハ内閣總理大臣大藏大臣ニ止メタルモ原來是レ各
省ニ關連スルモノナルヲ以テ國務各大臣ヲシテ副署セシムルコトト
ナシタリ決算ニ至リテハ帝國議會開設以前ニ係ルモノハ豫算ニ均キ
形式ヲ以テ之ヲ公布シタル先例アリト雖其ノ性質ヨリスレハ是レ將
來ノ行爲ニ對スル標準ヲ示スモノニ非スシテ過去ノ行爲ニ就キ其ノ
成績ヲ報告スルモノナリ而シテ一旦會計検査院ノ検査ヲ經タル決算
18

ハ茲ニ確定ヲ告ケ更ニ帝國議會ニ於テ検査ノ手續ヲ再スルノ餘地ヲ
存スルコトナシ故ニ決算ハ帝國憲法第七十二條ニ依リ會計検査院ノ
検査報告ヲ以テ政府ヨリ議會ニ提出スルニ止メ必スシモ之ヲ公布ス
ルノ要ナキモノトス是レ之ヲ爲ニ公式ヲ定ムサル所以ナリ

第十一條 閣令ニハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

省令ニハ各省大臣年月日ヲ記入シ之ニ署名ス
官内省令ニハ各省大臣年月日ヲ記入シ之ニ署名ス
恭テ按スルニ公文式第四條ニハ内閣總理大臣及各省大臣ハ法律勅令

ノ範圍内ニ於テ其ノ職權若ハ特別ノ委任ニ依リ閣令又ハ省令ヲ發スルコトヲ得ル旨ヲ規定スルモ是官制ニ定ムヘキ事項ニ屬スルヲ以テ之ヲ省キ本條ニ於テハ惟其ノ公布ノ方式ヲ定メタリ從テ閣令ヲ發スルノ權限ハ公文式ノ廢止ト共ニ内閣ノ官制ニ之ヲ規定スルノ必要アリ但シ各省大臣ノ省令ヲ發スルノ權限ニ就テハ各省官制通則第四條ニ重ネテ規定スルモノアルニ依リ公文式ノ廢止ハ之ニ關シテ何等支障ヲ生スルコトナキナリ

從來ニ省以上ノ大臣ニ於テ同一ノ省令ニ署名シタルノ慣例ハ正當ノ形式ト云フヘカラス何トナレハ省令ハ一省ノ事務ニ就キ單獨ニ之ヲ發スヘキモノナルニ因リ理ニ於テ二省以上ニ跨ルモノアルコトヲ得サレハナリ要スルニ一省ノ事務ニシテ他省ノ事務ニ聯涉スル場合ニ於テハ宜ク各別ニ省令ヲ發シ又事體ノ何如ニ依リテハ勅令ノ發布ヲ仰クヘキナリ

本條ノ省令ニハ宮内大臣ノ發スル省令ヲモ包含ス從來宮内省達ハ之ヲ甲乙ノ二種ニ分テ其ノ勅裁ヲ經タルモノヲ甲種トシ勅裁ヲ須タサルモノヲ乙種トシタリ而シテ所謂宮内省達ハ其ノ皇室部外ニ對スル場合ニ於テハ官廳及人民ヲ拘束スルノ効力ヲ有セシムヘキモノアリ因テ本令ノ發布ト共ニ宮内省官制ヲ改正シ宮内大臣ヲシテ省令ヲ發セシムルコトヲ認ムルノ必要アルヘシ本令ハ此ノ改正ヲ豫期シテ茲ニ閣令省令ノ公式ヲ定ムルモノナリ

第十二條

皇室ノ大事ニ關スル詔書皇室ノ事務ニ關スル勅書及皇室令ノ正本ハ圖書寮ニ於テ尚藏ス

大權ノ施行ニ關スル詔書國務大臣ノ職務ニ關スル勅書法律勅令及歲計豫算ノ正本ハ内閣ニ於テ尚藏シ國際條約ノ正本ハ外務省ニ於テ尚藏ス

勅書ノ正本ヲ交付シタルトキハ前二項ニ從ヒ其ノ副本ヲ保存ス
皇室典範ノ改正ノ正本ハ圖書寮ニ於テ尚藏シ副本ハ内閣ニ於テ保存ス
帝國憲法ノ改正ノ正本ハ内閣ニ於テ尚藏シ副本ハ圖書寮ニ於テ保存ス
閣令ノ正本ハ内閣ニ省令ノ正本ハ各省ニ於テ保存ス

恭テ按スルニ本條ハ各種公文ノ本書ヲ保存シテ以テ異日ノ左券タラシメムカ爲ニ之ヲ規定ス尚藏保存初二義ナシ唯御璽ノ有無ニ視テ其ノ稱呼ヲ異ニシタルノミ皇室典範帝國憲法ノ制定ニ當リテハ各二本ヲ作り一本ハ内閣ニ一本ハ圖書寮ニ於テ尚藏セシメタリ之ヲ改正スル場合ニ於テモ亦宜ク此ノ例ニ沿ルヘシ但シ一ヲ正本トシ他ヲ副本

トシテ其ノ差異ヲ示シタルハ左券ヲ明覈ニシ異日ノ滋端ヲ防クニアリ其ノ餘ノ公文正本ノ保存ハ各其ノ出所性質ニ依リ其ノ場所ヲ異ニス條約ノ正本ヲ外務省ニ保存スルハ國際上ノ慣例ヲ參酌シタルナリ勅書ハ時ニ其ノ正本ヲ以テ關係者ニ交付セラルルコトアリ例ハ曾テ豫算ノ議定權ニ關シ貴族院ヨリ奉リタル奏議ニ對シ下サレタル勅裁ノ如シ此ノ如キ場合ハ其ノ副本ヲ保存スルコトトセリ
皇室典範及帝國憲法ハ兩本共ニ各其ノ形式ヲ同クシタルモ其ノ改正ノ副本及關係者ニ交付シタル勅書ノ副本ニ至リテハ必シモ正本ト同一ノ公式ニ依リ調製スルノ要ナシ應ニ正本ニ年月日ヲ記入シタル大臣ニ於テ副本ニ其ノ校對差訛ナキ旨ヲ記入シ署名スルヲ以テ足レリトスヘキナリ

○勅令、閣令及省令ハ別段ノ施行時期ヲ場合ノ外

第十三條 皇室令、宮内省令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス其ノ他ノ命令ハ公布ノ日ヨリ起算シ滿二十日ヲ經テ之ヲ施行ス

別段ノ施行時期アル場合ハ前項ノ限ニ在ラス

恭テ按スルニ本條ハ各種命令ノ施行時期ヲ一定シタリ詔書、皇室典範、帝國憲法ノ改正及國際條約ハ特ニ本令ニ於テ施行時期ヲ定ムルノ必要ヲ見ス豫算ハ施行ノ時期自ラ一定セリ皇室令及宮内省令ニ至リテハ主トシテ皇室部内ニ向テ施行スヘキモノナルカ故ニ即日施行ヲ原則トシ特殊ノ事情アル場合ニ於テ特殊ノ施行時期ヲ定ムルモ亦敢テ不可ヲ見ス之ニ反シ勅令、閣令、省令ニ至リテハ公布ト施行トノ間ニ一定ノ期間ヲ存スルヲ妥當トス而シテ法律ハ既ニ法令第一條ニ於テ公布ノ日ヨリ滿二十日ヲ經テ之ヲ施行スルノ原則ヲ定メタルカ故ニ命令モ亦宜ク之ニ準シテ全國劃一ヲ期スヘシ別段ノ施行時期アル場合ト云ヒテ特別ノ施行時期ヲ定メタル場合ト云ハサルハ故ヲ明文ヲ設

ケス其ノ命令ノ内容ニ因リ特別ノ施行時期ニ依ルコト明瞭ナル場合ヲ含蓄セシメタルナリ

公文式ニシテ廢止セララルトキハ同第十二條ニ定メタル北海道、沖繩縣及島地ニ關スル特別ノ施行時期ハ別ニ之ヲ定ムルノ必要アルヘシ但シ明治二十九年勅令第二百九十二號ヲ以テ定メタル臺灣ニ於ケル特別施行時期（官報到達ノ翌日ヨリ起算シテ七日）ハ依然有效タルヘキナリ

省

第十四條 法律命令ハ各其ノ種別ニ從ヒ公布ノ順序ニ依リ號數ヲ附シ毎
年之ヲ更新ス

恭テ按スルニ本條ハ從來法律命令ニ號數ヲ附シタルノ慣例ヲ認メ各
種公文ニ於テ何年皇室令法律勅令閣令省令第何號ト稱呼スルノ便ヲ
圖リテ法令公式ノ一端ト爲シタルモノナリ

第十五條^二

前數條ノ公文ヲ公布スルハ官報ヲ以テス

其テ按スルニ本條ハ公文式第十條ノ規定ヲ敷衍シテ詔書、皇室典範、帝國憲法ノ改正、皇室令、國際條約及歲計豫算ニ及ホシタルモノナリ

有ラ

第十七條 前條ニ依リ公布シタル公文ノ誤謬ヲ訂正スルハ其ノ公文ニ副

署シ又ハ署名シタル一大臣ノ名ヲ以テシ之ヲ官報ニ登載ス

恭テ按スルニ本條ハ公文正誤ノ公式ヲ一定シタリ從來法律命令其ノ

他ノ公文ヲ官報ニ登載スルニ當リ誤謬アリタルトキハ内閣又ハ各省書

記官ノ名ヲ以テ正誤ニ或ハ單ニ誤植トシテ正誤スルヲ例トシタリ然

レトモ此ノ如キハ重大ノ事ニシテ公布ノ任ニ當リタル者宜ク其ノ正

誤ノ責ニ任スヘキモノトス因テ新ニ本條ノ制ヲ設ケタリ但シ概シテ

誤謬ト云フトキハ報告ノ錯誤ニ因ルモノト印刷ノ錯誤ニ因ルモノト

ヲ問ハス總テ本條ニ依リ正誤スヘキモノナリ

數人連署シタル公文ノ誤謬ヲ訂正スル場合ニ於テ之ニ署名シタル者

ヲモテ悉ク正誤ノ末ニ記名セシムルハ甚煩冗ナルヲ免レス故ニ定メ

テ一大臣ト曰フ

者

第十七條 臺灣總督府其ノ他地方官廳ニ於テ發スル命令、公式ハ別ニ定

ムル所ニ依ル

恭テ按スルニ臺灣總督府、發スル命令ハ明治三十四年總督府令第百
三號ヲ以テ公布式ヲ定メ其ノ他、地方官廳ヨリ發スル命令ハ明治二
十六年勅令第百九十九號ヲ以テ公布式ヲ定メタリ因テ本令ハ地方官
廳ノ發スル命令、公式ヲ比喩、勅令ニ讓リテ茲ニ規定セサルナリ但
シ公式ト云フトキハ施行時期ニ其ノ中ニ包含スルモノトス

第十八條

國書其、他外交上、親書、條約批准書、全權委任狀、外國派遣官吏委任狀、外國領事認可狀、親署、後國璽ヲ鈐シ土任、國務大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス外務大臣ニ授クル全權委任狀ニハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス

恭テ按スルニ本條ハ公文式第十六條ノ規定中外交ニ關スル公文ヲ一括シテ之ニ外交上ノ親書及全權委任狀ヲ加ヘ其ノ公式ヲ改定シタルモノナリ但シ外國領事認可狀ト云ハルハ奏任官待遇ノ領事ニ向テ發セラルルモノヲ指ス、判任官待遇ノ領事ニ向テ發スルモノハ本令ニ制定スルノ限ニ在ラサルナリ外務大臣ニ授クル全權委任狀トハ條約締結又ハ國際會議參列ノ場合ニ授クルモノヲ謂フ此ノ場合ニ於テ内閣總理大臣之ニ副署スルハ慣例ニ依ルナリ

第十九條^四 親任式ヲ以テ任スル官ノ官記ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス
 内閣總理大臣ヲ任スルノ官記ニハ他ノ國務大臣又ハ内大臣宮内大臣ヲ任スルノ官記ニハ内大臣内大臣侍從長ヲ任スルノ官記ニハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス

前二項ニ依ルモノノ外勅任官ノ官記ニハ御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス宮内官ニ就テハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス
 奏任官ノ官記ニハ内閣ノ印ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ヲ宣ス宮内官ニ就テハ宮内省ノ印ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ宣ス
 恭テ按スルニ本條ハ官記ノ公式ヲ定ムルモノニシテ大抵從來ノ慣行ヲ斟酌シ其ノ方式ヲ定メタルニ過キス獨内閣總理大臣ヲ任スルノ官記ニ至リテハ慣例一定セズ當然ノ順序ハ他ノ國務大臣ヲ任スルノ官記ニ在リ而シテ他ノ國務大臣皆故障アル場合ノ為ニ特ニ内大臣ヲ

シテ副署セシムルノ便法ヲ取りタリ
 總理大臣在職中旅行疾病等ノ故障ニ因リ他ノ國務大臣ヲシテ代理ノ署セシムルハ實際止ムヲ得サルノ變例ナリト雖是レ臨時代理事務ノ一端ナルヲ以テ之ヲ為ニ別ニ明條ヲ設ケス然レトモ之ヲ設ケサルハ之ヲ認メサルニ非サルナリ
 敬等ノ辭令書ハ之ヲ官記中ニ包含セシメタリ

者

第二十條 親補式ヲ以テ補スル職及官吏ニ非スレテ法令ニ依リ勅任スル者ノ職記ニハ御璽ヲ鈴シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス
別段ノ規定アルモノヲ除ク外上裁ヲ經テ勅奏任官ヲ補スルノ職記ニハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ署名ス陸海軍奏任武官同相當官ニ就テハ陸軍大臣又ハ海軍大臣、宮内官ニ就テハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

恭テ按スルニ補職ノ公式ニ關シテハ現行法ニ何等規定ヲ存セス曰テ本條ハ從來ノ慣行ニ鑑ミ事理ニ照シテ其ノ公式ヲ一定シタリ法令ニ依リ勅任スル者トハ議院法ニ依リ勅任スル貴衆兩院議長副議長及貴院令ニ依リ勅任スル議員ノ如キヲ云フ高等教育會議規則ニ依リ勅命スル議長副議長モ亦之ニ準ス日本銀行總裁ハ勅任ナリト雖國家ノ職務ヲ行フモノニ非サルカ故ニ本條ニ依ルノ限ニ在ラス第二項ニ別段ノ規定アルモノト云ヘルハ主トシテ裁判所構成法ニ依リ上裁ヲ經テ

28

司法大臣ノ補職スル司法官ヲ指スナリ而シテ上裁ヲ經テト云フトキハ各省大臣ノ職權ヲ以テスル補職ニ及ハサルコトモ亦自ラ明ナリト

十五

○親任式ヲ以テ任シタリ

○御璽ヲ鈐シ

第二十一條 勅任官ヲ免スルノ辭令書ニハ内閣總理大臣首ヲ奉シ年月日ヲ記入シ之ニ署名ス宮内官ニ就テハ宮内大臣首ヲ奉シ年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

内閣總理大臣ヲ免スルノ辭令書ニハ他ノ國務大臣又ハ内大臣宮内大臣

ヲ免スルノ辭令書ニハ内大臣首ヲ奉シ年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

前項ニ依リ外勅任官ヲ免スルノ辭令書ハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

宮内官ニ就テハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

上裁ニ依リ免職退職停職休職非職待命復職ノ辭令書ハ前條第二項ニ準

ス 恭テ按スルニ免官免職ノ公式ニ關シテモ亦現行法ニ一定ノ準規ナリ

而シテ其ノ慣例モ亦未タ依據スヘカラサルモノ多シ例ハ國務大臣

ヲ免スル辭令書ノ如キモ唯内閣ノ二字ヲ署スルニ止メタルハ章體宜

ク得タルモノト謂フヘカラス因テ本條ハ事宜ニ考ヘテ其ノ公式ヲ創

定シタル第一項勅任官ト云ヘル中ニハ親任式ヲ以テ任スル官ヲ包含

ス内閣總理大臣ヲ免スルノ辭令書ニ關シテ特例ヲ設ケタル理由ハ其ノ

任命ノ場合ニ於ケルト同一ナリ第四項ニ於テ上裁ニ依ルト云ヘルハ

各省大臣ノ職權ヲ以テスル免職退職等ヲ包含セシメサルノ意ニシテ

第二十條ニ謂フ所ノ官文ニ非スシテ法令ニ依リ勅任シタル者ヲ免ス

ルノ辭令書モ亦本項ニ依ルナリ

記入シ之ヲ奉ス

宮内大臣年月日ヲ

第^{十六}二十二條 爵記ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ

副署ス

恭テ按スルニ華族令第一條ニ爵ヲ授クルハ勅旨ヲ以テシ宮内大臣ニ
ヲ奉行ストアルモ是レ宮内大臣ニ於テ旨ヲ承ケ執行スルコトヲ規定
シタルモノニシテ爵記ノ公式ヲ定メタルモノニ非ス故ニ茲ニ慣例ニ
基キ其ノ公式ヲ定メタリ

〇十七

第二十三條

〇親署ノ後

署ス

一位ノ位記ニハ御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ副

二位以下四位以上ノ位記ニハ御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ

奉ス五位以下ノ位記ニハ宮内省ノ印ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之

ヲ賞ス

恭テ按スルニ本條ハ欽位條例第三條ノ旨趣ニ考ヘテ公式ヲ一定シタ

ルモノナリ但シ一位ハ親授ナルヲ以テ其ノ位記ニハ宮内大臣ノ副署

ヲ要スルコトトシタリ

。十八

第二十四條 爵位ノ返上ヲ命レ又ハ允許スルノ辭令書ニハ宮内大臣首ヲ
奉シ年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

恭テ按スルニ爵位記ノ返上ヲ命レ又ハ之ヲ允許スルノ辭令書ハ從
來一定ノ公式ナシ然レトモ既ニ授爵位ノ公式ヲ定ム則チ其ノ返上
ニ關スルノ公式モ亦宜ク之ヲ明文ニ著スヘシ同テ本條ヲ規定ス

第十九

三

三

三

第二十五條 勲三等功。五級以上ノ勲記ニハ親署ノ後國璽ヲ鈐シ勲四等功
六級以下ノ勲記ニハ國璽ヲ鈐シ内閣總理大臣旨ヲ奉シ賞勲局總裁ヲシ
テ年月日ヲ記入シ之ニ署名セシム

勲記ニハ勲章ノ種別ニ從ヒ號數ヲ附シ簿冊ニ記入スル旨ヲ附記シ賞勲
局ノ印ヲ鈐ス。シ賞勲局書記官之ニ署名ス

恭テ按スルニ本條ハ公文式第十六條ヲ基ニ慣例ヲ參酌シテ勲記ノ公
式ヲ定メタリ從來勲記ハ佛國「レジオン、ドン」ノ「エール」ノ制ニ倣ヒ賞勲

局總裁ニ於テ年月日ヲ記入シ署名スルノ形式ヲ用キタリト雖事固ヨ
リ大權ノ施行ニ屬ス形式實體俱ニ妥當ナラス然レトモ今遽ニ之ヲ改

ムルハ實際ノ事務ニ干格ヲ生スルノ虞アルヲ以テ姑從前ノ形式ヲ存
シ賞勲局總裁ハ内閣總理大臣ノ命ヲ承ケ年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

ルノ義ヲ取ルニ止メ異日機會ヲ待テ之ヲ釐正シ名實俱ニ全カラシム
コトヲ期ス

第二十六條 記章及褒章、證狀並外國勲章及記章ノ佩用免許ノ證狀ニハ
内閣總理大臣首ヲ奉シ賞勲局總裁ヲシテ年月日ヲ記入シ賞勲局ノ印ヲ
鈐シ之ニ署名セシム

證狀ニハ其ノ種別ニ從ヒ號數ヲ附シ簿冊ニ記入スル旨ヲ附記ス。シ賞勲局ノ
印ヲ鈐シ賞勲局書記官ニシテ署名ス
恭テ按スルニ本條ノ證狀ハ勲記ニ準スヘキモノニシテ未タ一定ノ公
式ヲ存セサルモ前條ノ例ニ從ヒ新ニ之ヲ補充シタルナリ

第二十。七。一。 勲章^及記章。ヲ褫奪スルノ辭令書ニハ内閣總理大臣旨ヲ奉シ賞

勲局總裁ヲシテ年月日ヲ記入シ之ニ署名セシム

恭テ按スルニ勲章記章ノ褫奪ハ從來上奏ヲ經賞勲局ノ名ヲ以テ辭令書ヲ發シタルモ第二十五條ノ例ニ從ヒ本條ノ如ク改メタリ

。並外國勲章及記章ノ佩用免許ノ證狀

省

第二十八條 御璽國璽ハ内大臣ヲシテ之ヲ鈐セシム

恭テ按スルニ本條ハ公文式第十四條ヲ比ニ移ニタルナリ御璽國璽尚
藏ノ事ハ内大臣官制ト重複ニ涉レルヲ以テ之ヲ省ケリ

附則

第二十九條 本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

公文式ハ之ヲ廢止ス

恭テ按スルニ本條ハ本令ノ施行時期ヲ定メタルナリ而シテ本令ノ施行前ニ公布セラレタル命令ノ施行時期ハ仍公文式ノ定ムル所ニ依ルヘキハ當然トス



